

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 9 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520743

研究課題名（和文） 古典期におけるマケドニア人のエスニック・アイデンティティに関する研究

研究課題名（英文） A Study on Macedonian Ethnic Identity during the Classical Period

研究代表者

澤田 典子 (SAWADA NORIKO)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：50311650

研究成果の概要（和文）：本研究では、古典期のマケドニアとアテナイの関係はマケドニアの木材の交易を軸とした緊密なものであったこと、そして、ギリシア文化がマケドニア王家およびエリート層に前5世紀以来かなり浸透していたことを検証し、これらのファクターがマケドニア人とギリシア人の相互認識のあり方に影響したと結論づけた。そうしたなかで形成されたマケドニア王のギリシア人としてのイメージが、フィリポス2世によるギリシア征服の進展の重要な基盤となったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study has shown that Macedonia and Athens maintained a close relationship through the timber trade during the classical period, and that Greek culture was well adapted among the Macedonian royals and elites since the 5th century B.C.; these facts affected the way Macedonians and Greeks perceived each other. The image of Macedonian kings as Greeks, constructed in those circumstances, played an important role in the process of Philip II's conquest of Greece.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：西洋史

キーワード：古代史

1. 研究開始当初の背景

マケドニア王国については、前4世紀後半のフィリポス2世とアレクサンドロスの治世を除くと日本では殆ど研究されておらず、

欧米においても、1970年代以来マケドニア史研究が活況を呈しているものの、前7～5世紀については、文献史料上の制約から本格的に取り組まれていないのが現状である。

私はこれまで、マケドニアの台頭とフィリポス2世のギリシア制覇を前4世紀のギリシアの国際関係という枠組みのなかで詳細に解明する作業を進めてきたが、やはり、前7～5世紀のマケドニア王国を視野に入れぬまま、前4世紀という時代だけを取り上げてマケドニアの台頭を論じることの限界性を痛感するに至った。そうした認識から、萌芽研究(H18～20)「建国神話と考古資料から見る黎明期の古代マケドニア王国に関する研究」において、前7世紀半ばから前5世紀までのマケドニア王国史の解明に取り組んだ。この研究の一環として、前5世紀のマケドニア王たちがギリシア人としてのアイデンティティをギリシア世界に対して懸命にアピールしたことを丹念に跡づけたことから、マケドニア人のエスニック・アイデンティティのあり方を考察することがマケドニア王国の興隆の背景に迫る有効なアプローチになると考えるに至った。マケドニア人のエスニック・アイデンティティをめぐる問題は、現代のバルカンのマケドニア問題とも絡んで大きな関心を集めているテーマであるが、その膨大な議論は、主として、マケドニア人の民族系統・言語・文化がギリシア人のそれと同一であるかどうかの解明が焦点となっている。しかし、人間集団の相互交渉のなかで生成・変容する当時の人々の主観的かつ可変的な観念としてエスニック・アイデンティティをとらえる近年のエスニシティ研究の潮流に沿って、当時のマケドニア人とギリシア人の主観的かつ可変的な「相互認識」のあり方を同時代史料から問うことが肝要となる。

2. 研究の目的

本研究は、前4世紀半ばに飛躍的な発展を遂げてバルカン最強の王国へと成長したマケドニア王国の興隆という現象を、長期的な

枠組みにおいて多角的に解明することを目的とした。具体的には、マケドニア王国とポリス世界の接触が本格的に始まった前5世紀初頭からフィリポス2世が台頭する前4世紀半ばまでの時期を対象とし、マケドニア人のエスニック・アイデンティティのあり方について考察することによって、マケドニア王国の興隆の背景を探ることを課題とした。

本研究は、(1)マケドニア人とギリシア人の相互認識の問題を、ギリシア人のバルバロイ観の変容、およびギリシア人たる指標の比重の変化を踏まえて検討すること、(2)政治外交史とは切り離れた文脈のなかで取り上げられることの多いエスニック・アイデンティティを、前5～4世紀のマケドニアとアテナイの関係史のなかきめこまかく位置づけて考察すること、(3)フィリポス2世のギリシア征服という現象を、従来の政治的・軍事的側面からだけでなく、エスニック・アイデンティティという側面から検討すること、の3点が特色である。

3. 研究の方法

- (1) ギリシア人のバルバロイ観の変容、およびギリシア人たる指標の比重の変化について、同時代の古典史料をもとに検討した。
- (2) 前5～4世紀のマケドニアとアテナイの関係を、マケドニアの木材を軸としてきめこまかく検証した。
- (3) マケドニア人とギリシア人の相互認識について触れた同時代の著作家たちの立場や価値観を検討したうえで彼らの記述を分析し、両者の相互認識のあり方を解明した。
- (4) 前5～4世紀のマケドニアの言語と文化に関する文献史料・考古資料を分析し、ギリシア世界の言語・文化との同質性・異質性

を検討した。

(5) (4)で検討した「実態」と、マケドニア人とギリシア人の相互認識との関連について考察した。

(6) そうした「相互認識」が、フィリポス2世のギリシア征服の進展においてどのように作用したのかについて考察した。本研究で得た成果を、私がこれまで進めてきたフィリポス2世の時代の研究と結びつけ、マケドニアの台頭について多角的に理解することをめざした。

4. 研究成果

(1) 古代ギリシア人のエスニック・アイデンティティに関する先行研究を整理したうえで、主要な史料となる同時代の歴史叙述や悲劇作品を分析してギリシア人のバルバロイ観とギリシア人としてのアイデンティティの変遷について考察し、古典期におけるバルバロイ観は決して固定的なものではなく、ギリシア人たる指標も時代とともに変化したことを明らかにした。

(2) 前5世紀初頭のアレクサンドロス1世の治世から前4世紀半ばに至るまで、マケドニアとアテナイの関係はマケドニアの木材の交易を軸とした緊密なものであったことを、古典史料・碑文史料に即して検証した。そうした緊密な関係が、マケドニア人に対するギリシア人の認識の重要な土台となっていたと考えられる。

(3) マケドニア人とギリシア人の相互認識について、ヘロドトス・トゥキュディデス・エウリピデス・トラシュマコス・イソクラテス・デモステネスなどの同時代の著作家たちの記述をもとに考察した。これらの著作家た

ちの立場や価値観をその時代の文脈のなかで検討したうえで、それぞれの記事の文献学的先行研究を踏まえて考察し、マケドニア人とギリシア人の微妙かつ曖昧な相互認識のあり方を明らかにした。

(4) 前5世紀のマケドニアの言語・文化の解明につながる史資料は前4世紀に比べてかなり乏しいが、ヴェルギナ・ペラ・エアニなどをはじめとするマケドニア地方の発掘調査は、とりわけ21世紀に入ってから著しい進展を見せている。そうした最新の豊かな考古学的成果から、ギリシア文化の積極的な受容を図ったことが知られる前5世紀末のアルケラオスの治世以前より、ギリシア文化が、マケドニア王家のみならず、マケドニアのエリート層にかなり浸透していたことを検証した。

(5) マケドニアの言語や文化の「実態」が、(2)のマケドニアの木材の交易を軸として緊密に維持されたマケドニアとアテナイの関係や、(3)の同時代の古典史料の分析やからうかがえるマケドニア人とギリシア人の相互認識のあり方とどのように関連しているかについて検討した。一般のマケドニア人に関しては不明な部分が多いが、前5世紀前半からマケドニア王家とエリート層に認められる「ギリシア化」は、ギリシア世界におけるバルバロイ観の変容、およびギリシア人たる指標の比重の変化を背景に、彼らをバルバロイとしての蔑視から遠ざけることに寄与していたと考えられる。

(6) 前5世紀以来のマケドニア王家およびエリート層の「ギリシア化」、およびマケドニアの木材という「切り札」の存在によって、フィリポス2世の即位までに、マケドニア王

をギリシア人として受け入れる素地がギリシア世界にすでにできていたと考えられる。マケドニア王のギリシア人としてのイメージは、オリュンピアやデルフォイとの絆の喧伝をはじめとする「ギリシア化」の進展を前王たちよりも格段に積極的に進めたフィリポス2世自身の戦略とあいまって、彼のギリシア征服をスムーズにし、その進展に拍車をかけることになったと結論することができる。西洋古代史において重要な意味を持つマケドニア王国の台頭とフィリポス2世によるギリシア制覇の成功の要因については様々に論じられているが、エスニック・アイデンティティという側面からこの問題にアプローチした本研究の成果は、フィリポス2世のギリシア制覇の諸相を長期的な枠組みのなかで多角的に解明し、マケドニア史の「連続性」を軸としてその全体像を構築するための重要な土台となるものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 澤田典子、「フィリポス2世の墓」再考、古代文化、査読有、63巻3号、2011、pp. 39-59

[学会発表] (計0件)

[図書] (計4件)

- ① 歴史学研究会編、岩波書店、世界史史料 第1巻：古代のオリエントと地中海世界、2012、pp. 212-215
- ② 澤田典子、講談社、アテネ民主政、2010、総278頁
- ③ 桜井万里子・師尾晶子編、山川出版社、古代地中海世界のダイナミズム、2010、pp. 77-108
- ④ J. Roisman & I. Worthington eds., Wiley-Blackwell, *A Companion to*

Ancient Macedonia, 2010, pp. 392-408

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤田 典子 (SAWADA NORIKO)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：50311650